

現象学の原理と方法

岩内章太郎（早稲田大学）
批判的言語教育国際シンポジウム
2018年7月1日 / 武蔵野大学有明キャンパス

現象学

- ▶ 現象学はドイツの哲学者エドムント・フッサールによって創設された。現象学の関心は大きく言って二つに分けることができる。
- ① 認識問題を原理的に解決すること
- ② 意味や価値の本質学の地平を開くこと

認識問題

- ▶ 認識問題の基本形は、「主観は客観に一致するのか」として考えられることができる。この問題を現象学的に追いつめると、「私の見ている現象はあなたが見ているものと一致するのか」というふうになる。
 - ▶ 客観的認識が不可能だとしたら、あらゆる学問はその基盤を失う。あるいは、数学や論理学の客観性を説明できなくなる。また、社会的善悪についての善悪の判断の根拠も相対化される。
 - ▶ 逆に、絶対的な正しさを独断的に主張した場合、複数の絶対的な正しさを真理をめぐって争うことになる。あるいは絶対的な正しさはその正しさの外部の人間を排除する可能性も持つ。
- どのように考えればよいのか？

デカルトの解答

- ▶ デカルトは、懐疑主義は懐疑主義を徹底することで乗り越えられるはずだと考えた。
 - 「疑いうる一切について疑った結果残ったもの」＝「疑っていないという作用それ自体」
 - ここから有名な「我思う、故に我在り」が出てくる。すなわち、デカルトの明証。
 - ▶ ただし、コギト（主観）の明証だけでは客観に辿り着くことはできない。私にとって確からしいことがただちに客観認識を帰結しない。デカルトはどう考えたか。
- ① 数学への信頼
 - ② 神の誠実さへの信頼

フッサールの解答

- ▶ 認識問題へのフッサールの応答は、デカルトの方法を参照しつつも根本的には違うものとなる。認識問題を解決するにはどうすればよいのか。主観が客観に一致することはどのように保証されるのか。フッサールの答えは意外なものである。

「この問題全体が不合理である」

現象学の原理 = 現象学的還元

現象学的還元 (1)

- ▶ 認識問題全体の枠組みが不合理であるとはどういうことか。認識問題に厳密な意味において、私は私の認識から抜け出すことはできない。だから、「私は客観それ自体を認識できるのか」と問うことは不合理なのである。そういう考え方で認識問題は絶対に解くことができない。フッサールはそう考えた。
- ▶ 「私は客観それ自体を認識できるのか」と問うかわりに、「私はどういう条件で客観的な存在を確信しているのか」と問うこと。「目の前にあるものが私にはりんごが見える」という自然なものの見方を、「私の意識にどのような所与があって、私はここにりんごがあると確信しているのだろうか」という見方に変えてみることを現象学的還元と呼ぶ。

現象学的還元 (2)

【現象学的還元のフロー】

- ① 「客観的なもの」、「実在的なもの」は方法的に括弧に入れる。この操作は「エポケー」と呼ばれる。
- ② あらゆる存在は意識によって構成されたもの、つまり、あらゆる存在を「意識の確信」として考える。
- ③ そのうえで、ある存在を「客観的なもの」、「実在的なもの」と確信する条件と構造を考える。

現象学的還元 (3)

フッサールは、認識問題を解決するためには、いったんすべての認識を主観のうちに還元して、その確信の構造を確かめなければならないと考えた。従来の主観-客観という従来の対立図式を取り払って、すべての対象を意識の内部の確信と捉え、確信成立の構造を取り出すという方法をとる。

(A) 従来までの見方 (主観-客観図式)

ここにリンゴが存在する (客観) から、私はリンゴを見ている (主観)。

(B) 現象学的な見方 (内在-超越図式)

赤くて、丸くて、つやつやしているものが私の意識に与えられている (内在) から、私はここにリンゴが存在するという確信をもつ。

現象学の方法 = 本質観取

【現象学の原理と方法】

本質学

本質観取 = 共通洞察

方法

認識問題

現象学的還元 = 態度変更

原理

本質観取についての簡単な導入

- ▶ 本質観取は現象学的還元を遂行した上で行なう。
- ▶ 本質観取は、ある概念やことがらが私にとって持っている中心的な意味を取り出す作業。
- ▶ 要は「○○とは何か」と問うだけのこと。

本質観取を言語ゲームとして考えてみる

本質観取とは、ある概念の核心的な意味を、自らの経験を反省することによって、また同時に自由な想像によって、「言葉」として取り出す言語ゲームである。もちろん、その概念の本質は自分自身の「言葉」として取り出されるため、あくまで主観的なものではあるが、同時にその「言葉」が他者との「相互批評」にさらされることによって、普遍性を獲得していく可能性をもつ。言葉（世界像、認識性・欲望の秩序）の「相互交換」によって、いかに「相互主観的検証」を生み出していくかが、本質観取という言語の理解ゲームの目的となる。また、同時に差異に対しては「相互承認」の感度を育む。

本質観取の原則

1. 客観存在の概念をエボケー（視線変更・態度変更）し、認識と知覚の因果関係を逆転する。（例えば、辞書に載っている意味や偏い字が定義した意味などは全てエボケーされる。あくまで、自分自身の内面から取り出すこと。）
2. それらの概念、理念、観念を変えている本質認識、構造認識を、自らの経験を内省することによって「言葉」として取り出す。「○○は何か」と問い、○○をどのような言葉で言い当てられるのかを考える。
3. 取り出された「言葉」は他者との「相互批評」によって吟味されることによって、「私の意味」から「人間一般に妥当する意味」へと洗練されていく。
4. 本質を取り出すことは、絶対的「真理」を取り出すことではない。「言葉」の強度を試みようことによって、万人に共通する概念の本質構造を目がけることが主眼である。

本質観取について少し整理する

1. 本質観取は、哲学の歴史の中でまったく新しい方法というわけではない。優れた哲学者は本質観取を用いて哲学を展開してきた。その方法の自覚化が本質観取だと言える。
2. 他の哲学ディベートとどう違うのか。ひとつの大きな特色は「みんなに共通するものを探しましょう」というモチベーション。この点、カフェで自由に話し合ったり、降参Aと降参Bに分れてのディベートと区別される。
3. さらに特色を挙げるならば、本質観取には認識論的正当性が組み込まれている。つまり、「どうすれば多様性を抑圧せずに共通認識を確保できるのか」といった哲学的洞察が織り込まれている。この点、相対主義と独断主義のどちらからも現象学は距離を取る。

本質観取のプロセス

1. 何についてどのような観点から考えるのかを決める（関心の共有）。西語「観点相関性」。
2. 体験、エピソード、事例などを話し合う（体験の記述）。
3. さまざまな体験、エピソード、事例に共通する条件と構造を考える（本質洞察）。

ハイデガーによる死の本質観取

- 1 経験不可能性
- 2 あらゆる可能性の終焉
- 3 自己固有の可能性（交換不可能性）
- 4 不安
- 5 隠蔽、打ち消し、馴致（じゅんち）
- 6 頹落／本来性（自己固有性）の契機

本質観取の意義

- ①自己了解と他者了解
- ②信念の批判的検証
- ③既存の理論の正当性の吟味
- ④信念対立の調停
- ⑤共通了解の創出